

ラピタ人の起源とオーストロネシア語族の拡散

石 村 智

【要約】 「民族」を科学的に定義しようとする試みにおいて近代以降に考古学が果たしてきた役割は大きい。しかし近年では言語学・考古学・形質人類学などの連携による学際的な研究が重要になってきている。本論ではそうした研究の一例として、オセアニアへの人類の移動におけるラピタ人とオーストロネシア語族に関する研究を概観し、批判的検討を加えた。その結果、東南アジア島嶼部におけるオーストロネシア語族の拡散と新石器文化の成立が関連するという従来のシナリオは成立せず、オーストロネシア語族の拡散は人間集団の実際の移動にともなうよりもむしろ、地域間の交易を通じて拡散した可能性が示された。さらにオセアニアの初期居住民であるラピタ人は遺伝的に多様な起源をもつ個体により構成された集団である可能性が示された。つまりラピタなる現象は、単一の民族の移動としてではなく、むしろ「民族」や「文化」を横断するムーブメントとしてとらえられるだろう。

史林 九四巻一号 二〇一一年一月

はじめに——民族と科学

「民族」という概念は、かつては「人種」とほぼ同一のものとして理解されていた。人種という概念は今日ではほぼ死語と化してしまっただが、かつては民族⇨人種は生物学的要因により規定されると考えられた。近代以降の広義の人類学（そこには形質人類学のみならず先史学・考古学・言語学・民族学も含まれる）の第一の目標は、この民族⇨人種を科学的に類型

化することであつたといつても過言ではない。^① そのなかで、近代において科学としての地位を確立してきた考古学が果たした役割は大きかつた。

民族についての科学的アプローチでもっとも大きなテーマとして議論されたのはインド・ヨーロッパ語族の問題である。この問題は一七八六年にウイリアム・ジョーンズが、サンスクリット語と、ギリシア語やラテン語との類似を指摘したことに始まる。^② 彼はこの事実からインドとヨーロッパの諸言語が全て同じ言語から派生したとの学説を立て、それらはインド・ヨーロッパ語族と名付けられた。その後一八五九年にマックス・ミュラーが、インド・ヨーロッパ語族の原型となる言葉を話していた住民は共通した民族意識を持ち、彼らがインドからヨーロッパにまたがる広い範囲を征服して自らの言語を広めた結果としてインド・ヨーロッパ諸語が成立したとする仮説を唱えた。^③ この祖集団はアーリア人（サンスクリット語で「高貴な人」の意）と名付けられ、アーリア人の拡散とインド・ヨーロッパ語族の拡散を関連付ける学説（アーリア人仮説）は一九世紀後半から二十世紀前半のヨーロッパ社会に大きな影響を与えた。例えば作曲家リヒャルト・ワーグナーは、ゲルマン人こそアーリア人の正統な後継者であると主張する一方で反ユダヤ主義を標榜し、この思想は熱心なワーグナー愛好家であつたアドルフ・ヒトラーに受け継がれた。

アーリア人仮説について考古学の立場から論じたのはグスタフ・コッシナであつた。彼が示した理論「居住地理論」においては、まず前提として、出土遺物のセット関係（すなわち複数の種類の遺物が一括で出土した時のその組み合わせ）はひとつの文化類型を構成し、ひとつの文化類型はひとつの民族に対応すると定義された。そしてある文化類型が分布する範囲はその帰属する民族の居住範囲を示し、そこから民族の起源や拡散について知ることができることとした。彼はこの理論により古代ヨーロッパにおけるゲルマン人の拡散を研究したが、彼の死後、その理論はナチス・ドイツによるゲルマン人至上主義の科学的根拠として利用されるようになった。^④ よく知られているように、ナチスは科学主義を標榜しており、自らのシンボルである鍵十字のシンボルをアーリア人のルーツと考えられたインドに求めた。またインド・ヨーロッパ語族はユ

ダヤ人が属するセム語族に生物学的に勝るとする「優生学」を根拠に、ユダヤ人の虐殺を正当化したのであった。

第二次世界大戦後、コッシナの理論はナチスとともに封印されたこととなったが、二十世紀半ばまでのヨーロッパの先史学・考古学における文化史的理解は基本的にコッシナの考えを踏襲するものであった。すなわち一括遺物における遺物の組成を単位として文化を設定し、編年研究においては異なる地域の一括遺物の中に見られる同一時期型式の遺物を手掛かりにした交差年代決定法による相対編年に基づいていたからである。当時の代表的先史学者であるゴードン・チャイルドもまた、著書『アーリア人』においてインド・ヨーロッパ語族の拡散を、騎馬民族に起源するクルガン文化の拡散に關連付ける考えを示している。^⑤これはマリヤ・ギンブタスにより「クルガン仮説」として継承され、黒海周辺の草原地帯がその起源地と想定された。^⑥

一方で、二十世紀後半に急速に發展した放射性炭素年代測定法により、従来の相対編年による年代は次々と書き換えられ、絶対年代による広い範囲の地域間での比較研究が可能となった。一九七三年にコリン・レンフルーは『文明の誕生』のなかで放射性炭素年代の成果を大々的に援用し、ヨーロッパ文明の起源を中東地域に求める仮説を提出した。^⑦レンフルーはさらにインド・ヨーロッパ語族の起源問題にも挑み、一九八七年に『ことばの考古学』を上梓した。^⑧彼はヨーロッパの先史文化の中にかなるクルガン文化の痕跡も見いだせないことを考古学的証拠によって示し、従来の黒海周辺の騎馬民族起源説を批判した。そのうえで比較言語学の成果を援用し、インド・ヨーロッパ語族の拡散はこれまで考えられていたよりもずっと古く新石器時代に遡るといふ考えを示した。そしてその起源地はトルコ中部のアナトリアにあり、そこから新石器化と農耕の広がりによってギリシア、さらには地中海沿岸地域へ広がっていったと説明した。

さらに近年ではピーター・ベルウッドが『農耕起源の人類史』においてレンフルーの理論をさらに發展させ、インド・ヨーロッパ語族のみならず世界中の語族の地理的な分布は、新石器時代において農耕の技術をもつ人間集団が実際に移動・拡散したことを反映するという仮説を提示し、それをヨーロッパ大陸のみならずユーラシア大陸・インド亜大陸・南

北アメリカ大陸および東南アジア・オセアニア地域における膨大な新石器文化の考古学的証拠から証明しようとしている。^⑤ この著書の中でベルウッドは、あまり多くの分量を割いているわけではないが、近年の形質人類学や遺伝学の成果も参照し、より包括的なアプローチを試みている。

今や民族という問題を人類史の上から理解するには、考古学・言語学・人類学（形質人類学・遺伝学を含む）といった学問分野の横断的かつ包括的な理解が必要であるといっても過言ではない。残念ながら、世界のすべての地域においてこれらを検証する十分なデータがそろっているわけではないが、比較的高くしたデータが充実しており、研究が進んでいるのが、オーストロネシア語族が広がるオセアニア地域である。本論では、オセアニア地域における人類拡散の問題、特にオーストロネシア語族の拡散および、オセアニアの多くの人類集団の祖集団と考えられるラピタ人の起源の問題について検討することとしたい。これまでの研究成果を概観しつつ、批判的検討を加えることで、人類史上における「ラピタなる現象とは何か」について考察を加えたい。

- ① 片山一道「民族の表徴としての身体——人種神話への決別」野村雅一・市川雅編『叢書身体と文化（一）技術としての身体』大修館書店一九九九年、一八一—一九九頁。
- ② Jones, W. The third anniversary discourse, on the Hindus, Asiatic Researches I, 1788, pp. 415-431 (delivered 2 February 1786)
- ③ Müller, F. M. *A History of Ancient Sanscrit Literature*. (London: Williams and Norgate, 1859)
- ④ ロッソナおよびその弟子たちの業績とその評価については以下の文献を参照。Eggers, H. J. *Einführung in die Vorgeschichte*. (München: R. Piper, 1959) (H. J. エガース「田中珠・佐原真訳」『考古学研究入門』岩波書店、一九八一年)
- ⑤ Childe, V. G. *The Aryans: A Study of Indo-European Origins*. (London: Kegan Paul, 1926)
- ⑥ Gimbutas, M. *The Prehistory of Eastern Europe*. (Cambridge: Peabody Museum, 1956)
- ⑦ Renfrew, C. *Before Civilization: The Radiocarbon Revolution and Prehistoric Europe*. (London: Cape, 1973) (ロリン・レンフルー「大貫良夫訳」『文明の誕生』岩波書店、一九七九年)
- ⑧ Renfrew, C. *Archaeology and Language: The Puzzle of Indo-European Origins*. (London: Cape, 1987) (ロリン・レンフルー「橋本穂矩訳」『言語の考古学』青土社、一九九三年)
- ⑨ Bellwood, P. *First Farmers: The Origins of Agricultural Societies*. (Malden: Blackwell, 2005) (ピーター・ベルウッド「長田俊樹・佐藤洋一郎監訳」『農耕起源の人類史』京都大学学術出版会、二〇〇八年)

第一章 オセアニアへの人類の拡散

オセアニアの地理区分は伝統的に、ポリネシア・メラネシア・ミクロネシアの三つに分けられ、それぞれポリネシア人・メラネシア人・ミクロネシア人という「人種」民族」が分布するとされてきた(図1)。このうちポリネシア人は大柄な体格と明褐色の肌、豊かな黒髪をもつとされ、一方メラネシア人は比較的小柄で、黒褐色の肌と縮れた頭髪をもち、ネグロイドに似た外見をもつとされた。ミクロネシア人はポリネシア人と似た外見をしているが、やや小柄な体格をもつとされた。こうしたグループ分けはそもそも、ヨーロッパ人の地理探検の頃、一八〜一九世紀にかけて流行するようになったのだが、いつの間にかすっかり定着してしまい、それぞれの「人種」のルーツや系譜関係を詮索するのが、つい最近に至るまで、オセアニアの人類学のパラダイムであった^①。

オセアニアの世界が地理的に「発見」されたのは、コロンブスがアメリカ大陸に到達したの続き、一五二〇年に南米大陸をめぐって太平洋に到達したマゼランの航海が始まりである。その後、多くのスペイン船やポルトガル船が太平洋を航海するようになったが、十八世紀になるとイギリスのジェームス・クック船長が三次にわたる探検航海を実施し、タヒチ・ハワイ・トンガ・イースター島・ニューカレドニア・ニュージーランドといった主だった島々に上陸し、詳細な航海日誌と調査記録を残した^②。

こうしたヨーロッパ人の航海者たちがまず驚いたことは、絶海の孤島と思われるような島々にさえ、現地人がいたことである。そして、彼らの話す言葉が、たとえハワイとニュージーランドのように何千キロメートルも隔てられた島々であっても、驚くべき共通性があったことである。さらに、ハワイ・ニュージーランド・イースター島を結ぶ三角形の中に位置するポリネシアの島々の住人が、まるでひとつの民族であるかのような顕著な同一性を示していた。彼らは男女ともみな立派な体格で、明褐色の肌と豊かな黒髪をもち、高度な航海技術や複雑な社会組織、洗練された神話体系を有していた



図1 オセアニアの地理区分

のである。彼らポリネシア人は、ヨーロッパ人の目にとって「高貴な未開人」と映り、高度な文明を築いた民族の末裔ではないかと信じられたのである。一方で、メラネシアの住人はネグロイドに似た外見をもち、またその社会は野蛮で首狩りや喰人をもなうものとして恐れられた。しかしクック船長はメラネシアの住人が人種的な見た目が異なるにもかかわらず、言語的にはポリネシア地域と高い共通性がみとめられることに気付いていた。

十九世紀以降、ポリネシア人をはじめとするオセアニアの住人たちの起源をめぐる様々な学説と憶説が飛び交った。中には失われた大陸の住人の子孫であるなどといった珍説・奇説もあったが、大まかには次の三説にまとめられよう。

- ① ポリネシア人の起源はアメリカ・インディアンで、東方のアメリカ大陸から移住してきた。
 - ② ポリネシア人の起源は東南アジア地域で、西方から移住してきた。
 - ③ ポリネシア人の起源は白人、すなわちコーカソイドである。
- このうち①は、外見上の類似に加え、太平洋上に吹く貿易風が東風であることから、風まかせの古代の航海では東からの移動を考えるほうが自然であるとみなされた。

②は、やはり外見上の類似に加え、言語的な共通性が根拠となっている。

クック船長が当初から気付いていたように、ポリネシアの諸言語はマレー語と非常に類似していたのである。東南アジアからの移動のルートについては、メラネシアを経由したルートと、ミクロネシアを経由したルートが想定された。

③は根拠に乏しいものの、外見上の直感的な類似や、複雑な社会組織の存在から、このような憶説が生まれるに至った。この説はまた①とも結びつき、エジプト人やフェニキア人、あるいは失われたイスラエルの支族がはるか昔にアメリカ大陸に渡り、そこを経てポリネシアに至ったという説も唱えられた。

二十世紀前半になってポリネシア人の起源について最も有力な考えを示したのが、ハワイのビショップ博物館の館長であったピーター・バック（テランギ・ヒロア）である。彼は言語的・文化的な系統関係を検討した結果、ポリネシア人は東南アジアからミクロネシアを経由して移住してきたという説を唱え、一九三八年に『偉大なる航海者たち』を出版した。^③ミクロネシアの住人は、外見的にも文化的にもポリネシア人との類似性が認められる。一方、メラネシアの住人はポリネシア人とは外見的に大きく異なる。また社会階層化といった社会組織の面においても、ポリネシアでは首長制による複雑社会が形成されていたのに対し、メラネシアでは未発達である。こうしたことから、メラネシアを経由したとする説を棄却し、ミクロネシア・ルートを支持した。彼の本は世界に広く読まれ、二十世紀前半までのオセアニアの人類史において非常に有力なシナリオとみなされるようになった。

ハイエルダールとコンティキ号

一九四七年、ノルウェー人のトール・ハイエルダールは、仲間とともにバルサ材の筏「コンティキ号」を用いて南米ペルーから太平洋を西に航海し、仏領ポリネシア・ツアモツ諸島のラロイア環礁に至る実験航海をおこなった。彼は航海に先立ち、ペルーにあるインカの石像とポリネシアのイースター島にある石像（モアイ）が類似していることを指摘し、ポリネシア人はアメリカ大陸からやってきたとする考えを示したが、学界ではまったく注目されなかった。そこで彼は自分

の考えが正しいことを示すため、ペルーからイースター島への実験航海を試み、実際にアメリカ大陸からポリネシアに技術的に航海可能であることを証明した。その様子は著書『コンテキキ号探検記』として出版され、一般的にも広く知られるようになった^④。

その後、さらに彼は中米のアステカとエジプトの文明の類似性を指摘し、アステカ文明はエジプトからの移民によって築かれたとする説を唱えた。一九六九年に、彼はパピルスで作った船「ラー号」を用い、アフリカのモロッコからカリブ海を目指し、二度目の航海でこれを成功させた。一九七七年にはパピルス船「チグリス号」でインド洋の航海にも成功している。

ハイエルダールの構想は、インドーメソポタミアーエジプトーアステカーインカーポリネシアをつなぐ文明の連鎖が存在するという壮大なものであった。しかし後述するように、彼が「ラー号」の航海をおこなった一九六〇年代後半はすでに、ポリネシア人の起源、そしてオセアニアの人類史の理解が、「ラピタ人」の発見を契機に大きく転換していく時期であった。現在ではハイエルダールの説を支持するオセアニア研究者は皆無である。しかし彼の業績がオセアニア研究に大きなインパクトを与えたことは間違いない。

ラピタ人の発見

ラピタ人の発見の契機となったのは、その名の由来であるラピタ土器の発見に始まる。一九五二年にカリフォルニア大学のエドワード・ギフォードとリチャード・シャトラーがニューカレドニアで考古学調査を実施し、現地語でラピタと呼ばれる遺跡 (Site 13) で特徴的な土器を発見した^⑤。それは赤褐色の素焼きの土器で、表面には連続する刺突によって幾何学文様が施されていた (図2)。放射性炭素年代測定によりラピタ遺跡は紀元前に遡る結果が示されたことから、この土器群への注目は俄然高まった。そして類似の土器がパプアニューギニアのビスマルク諸島、ニューカレドニア、フィジー、

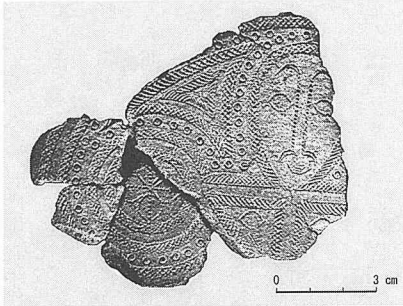


図2 ソロモン諸島リーフ・サンタクルーズ諸島出土の面文ラピタ土器 (本章注⑦ Green 論文, 28頁より)

トンガといった広大な範囲から見つかっていることから、かつてこの一帯に共通の文化をもった集団が存在し、そしてこの文化集団はこの地域で最も古い段階に属すると考えられたのである。その文化はラピタ文化複合 (cultural complex) と呼ばれ、集団はラピタ人と呼ばれるようになった。一九六〇年代からはラピタ人の研究はオーストラリア国立大学のジャック・ゴルソンとオークランド大学のロジャー・グリーンによって主導され、各地でラピタ遺跡の発掘が進められた。そして、西はパプアニューギニアから東はサモアまで、五千キロメートル以上にもわたる広範囲にラピタ遺跡が分布することが明らかにされた。

さてラピタ人の存在が重要な意味をもつ理由は、メラネシアとポリネシアの両地域にまたがって分布しているという事実である。伝統的な地理区分においては、フィジーとトンガ・サモアの間に境界が引かれ、その両側には異なる人々・異なる文化が存在するとみなされていた。メラネシアの住人とポリネシアの住人とは異なる人種であるとみなされ、そうしたことから、ポリネシア人の起源はメラネシアに求めることはできず、むしろより近い人種・文化を示すミクロネシアに求めるべきであるとするバックの考え方が有力だったのである。ラピタ人の発見は、こうしたオーソドックス・シナリオを覆し、ポリネシア人の起源をメラネシアに求める方向へ転換していく転換点となったのである。

ラピタ研究の進展と「台湾起源説」

一九七〇年代には発掘調査の事例が増加し、ラピタ人の文化について多くの知見が蓄積された。一九七九年には『ポリネシアの先史時代』が出版され、^⑥その中でグリーンにより「ラピタ」の章が執筆され、ラピタ人の具体像が示された。そ

れによると、放射性炭素年代測定の結果から、ラピタ人は紀元前一六〇〇年頃に出現し、ほどなくピスマルク諸島からサモアまでの範囲に拡散し、紀元前五〇〇年頃に消滅した。ラピタ人の文化は強い斉一性を示すが、ラピタ土器の文様を比較すると、ピスマルク諸島からソロモン諸島・ニューカレドニアに至るまでの地域と、フィジー・トンガ・サモアの地域との間に差があり、前者の地域の文様のほうが複雑なものが多いことを指摘した。ラピタ人は特徴的なラピタ土器のほか、石斧やシャコガイ製貝斧、貝製の道具や装飾品などを製作した。ラピタ遺跡は島の海岸部に立地する傾向にあり、砂浜海岸に貝塚を営む場合が多い。ラピタ人の生業は、魚類・貝類・ウミガメなどの海産物の獲得に加え、ブタ・イヌ・ニワトリといった家畜の飼育、さらにはタロイモ・ヤムイモ・バナナ・パンノキなどの作物を栽培する栽培農耕をおこなっていたと考えられた。さらにソロモン諸島のリーフ・サンタクルーズ諸島のラピタ遺跡からは二キロ以上離れたピスマルク諸島タラセア産の黒曜石が見つかることから、ラピタ人は遠距離交易をおこなっていたことが推測された。

またその前年にはピーター・ベルウッドによる大著『太平洋——東南アジアとオセアニアの人類史——』が出版され、ラピタ人およびオセアニアの人類拡散についてのまとまったシナリオが提示された^⑧。ベルウッドは比較言語学の成果を援用し、ラピタ人の存在を、東南アジアからオセアニアにかけてのオーストロネシア語族の拡散の一端に位置づけ、ラピタ人の究極の起源地を台湾に求めた。オーストロネシア語族とは、台湾から東南アジア島嶼部、オセアニア、さらにはマダガスカルにまで至る広範な地域に分布する語族である。比較言語学によるとオーストロネシア語族の故地は台湾にあり、そこから東南アジア島嶼部の諸言語、オセアニアの諸言語の順に拡散・分化していったとされる。ベルウッドはこの言語の拡散と新石器・農耕文化の拡散を関連付け、紀元前三〇〇〇年頃に新石器文化を有するオーストロネシア語族の言語集団が台湾から東南アジア方面へ進出し、さらにその一派が紀元前一五〇〇年頃にニューギニア島を経由してオセアニアに侵入し、ラピタ人になったと考えた。

オーストロネシア集団がオセアニアに侵入してきたとき、ニューギニア島およびソロモン諸島には先住民が存在した。

彼らはパプア諸語もしくは非オーストロネシア語族と呼ばれる諸言語を話し、形質的にも黒い肌・縮れた髪の毛などの特徴をもつ集団であった。彼らはオーストラロイドと呼ばれる集団に属し、そこにはオーストラリアの先住民(アボリジニ)も含まれる。彼らは完新世以前のおよそ七万〜二万年前までにオセアニアのオーストラリア・ニューギニア島・ソロモン諸島までの範囲に拡散・定着した。今ではこの更新世までに人類が拡散した地域をニア・オセアニア、完新世以降に人類が拡散した地域をリモート・オセアニアと呼ぶのが一般的となっている。そしてリモート・オセアニアに属するメラネシア島嶼部の東半分(ヴァヌアツ・ニューカレドニア・フィジー)とポリネシアは、いうまでもなくラピタ人の出現まで人類未踏の地であった。

ベルウッドは、オセアニアに侵入してきたオーストロネシア集団Ⅱラピタ人は、先住民であるオーストラロイドの集団とはほとんど接触を持たず、ニア・オセアニアの地域をほぼ素通りして一気にリモート・オセアニアの地域に侵入し、紀元前一五〇〇年頃に西ポリネシア(トンガ・サモア)まで至ったと考えた。そして西ポリネシアにおいてラピタ人はポリネシア人に変容し、西暦三〇〇年頃になって再び移動を開始し、東ポリネシアのマーケサス諸島、次いでタヒチなどソサエティ諸島(仏領ポリネシア)、さらにハワイ・イースター島・ニュージールランドに至るポリネシア全域への拡散を遂げたとした。一方、メラネシア島嶼部に留まったオーストロネシア集団Ⅱラピタ人の子孫は、後に拡散してきたオーストラロイド集団に吸収され、その結果、彼らはポリネシア人とは異なるオーストラロイド的形質を強く示す集団になったとした。ベルウッドのシナリオは、オセアニアにおける人類集団の起源と分布、とりわけメラネシアとポリネシアの住人の違いについて一定の説明を与えており、さらに言語学と考古学の成果を組み合わせた説得力のあるものとして評価され、後に著名な鳥類学者にして人類学者のジャレド・ダイアモンドによって「ポリネシア行き急行」仮説として一般にも広く紹介された。^⑩

「メラネシア自生説」とラピタ・ホームランド・プロジェクト

こうしたベルウッドの考えに対し、マシユー・スプリグスはラピタ文化がメラネシア地域、特にラピタ文化が最初に出現したビスマルク諸島周辺で自生的に発展したものであるという説を唱えた^⑩。彼はラピタ文化とそれ以降に発展したメラネシア地域の諸文化の文化要素を比較した結果、ラピタ文化の多くの要素はメラネシア地域で発展したものであると論じた。そのためラピタ人の起源について、東南アジア方面からのモンゴロイド集団の進入を想定する必要はなく、メラネシア在地のオーストラロイド集団から自生したと考えるのが妥当であると論じた。このラピタ人の「メラネシア自生説」は、従来のオースドックス・シナリオへのアンチ・テーゼとして一定の支持を集めた^⑪。

こうしたことから、一九八〇年代後半にはオーストラリア国立大学をはじめとする複数の大学・研究機関の調査団が協力し、ビスマルク諸島の各地で発掘調査を実施した。ラピタ人の起源問題の決着をつけるため、この計画は「ラピタ・ホームランド・プロジェクト」と名づけられ、この調査により多くの遺跡から確実な年代を得ることができた。その結果、ビスマルク諸島のラピタ遺跡の年代の上限はタレパケマライ（Talapakeamai）遺跡の紀元前一五〇〇年であり、従来のラピタ遺跡の年代観を大きく遡るものではなかった。一方でおよそ三万年前以降の更新世に遡る洞窟・岩陰遺跡も数多く見つかかり、これは先行するオーストラロイド集団による遺跡と考える。しかしこれらオーストラロイド集団による文化と、後のラピタ文化の間に系統的なつながりは見出せず、ラピタ文化がオーストラロイド集団の文化に由来するという「メラネシア自生説」は否定された。遺跡の分布においても、在地系の文化の遺跡が大きな島の内陸部に立地するのに対し、ラピタ遺跡は離島や大きな島の海岸部に立地することから、在地の集団とラピタ人は棲み分けをおこなって共存していた可能性が高いことがわかった。

その後のラピタ研究の進展

一九九〇年代以降、ラピタ研究はさらに隆盛し、定期的に「ラピタ会議」が開催され、各地域での調査成果の共有がなされるようになる。ラピタ遺跡の編年もより精緻なものとなり、特に放射性炭素年代の見直し^⑭およびラピタ土器の編年研究の進展により、ラピタ遺跡の年代には西から東にかけて年代が徐々に新しくなっていくという地理的勾配があることが明らかになり、「ポリネシア行き急行」仮説が想定するよりは拡散のスピードは緩やかで段階的であったことがわかった。こうした成果を受けて、グリーンはラピタ文化複合の形成を「トリプルIモデル」によって説明を試みる。トリプルIとは「侵入 (intrusion)」「統合 (integration)」「発明 (invention)」の頭文字である。ラピタ人の文化には、台湾—東南アジア起源の要素と、ニア・オセアニアに移動してから在地集団との交流の中で獲得した要素と、オセアニアの環境に適應する上で独自に獲得した要素との三つが存在し、それが組み合わせることで文化複合を形成していると論じた。このモデルでは、「ポリネシア行き急行」仮説が否定したメラネシアの在地集団との交流を積極的に評価している。

このようにラピタ人およびその文化についての研究は進展し資料も蓄積されてきたが、肝心の「ラピタ人はどこから来たのか」という問題についてはまだ不明な点が多い。そのためにはより西の地域、すなわちその起源地と目される台湾および東南アジア島嶼部の新石器文化との比較研究が不可欠である。そこで次章では、言語学・考古学・形質人類学の立場からラピタ人の故地を探る研究を概観し、総合的なシナリオを模索することとしたい。

- ① 片山一道「石器時代の遠洋航海者の系譜」大塚柳太郎・片山一道・印東道子編『オセアニア(一) 島嶼に生かぬ』東京大学出版会、一九九三年、三一一—八頁。
- ② Beaglehole, J. C. (ed.) *The Journals of Captain Cook on his Voyage of Discovery*. 5 vols. (Cambridge: Hakluyt Society, 1967-1969)
- ③ Buck, P. *Viking of the Sunrise*. (New Zealand: Whitcombe and Tombs, 1938) (P. H. ハック「鈴木満男訳」『偉大な航海者たち』)

④ Beaglehole, J. C. (ed.) *The Journals of Captain Cook on his Voyage*

- ④ Heyerdahl, T. *The Kon-Tiki Expedition*. (London: Allen and Unwin, 1950) (ト・ン・ティキの冒険記) 【水口尚江訳】「ト・ン・ティキ 冒険記」筑摩書房、一九六九年)
- ⑤ Gifford, E. W. and R. Shutler, Jr., *Archaeological Excavations in New Caledonia. Anthropological Records 18* (Berkeley: University of California Press, 1956), pp. 1-125.
- ⑥ Jennings, J. ed., *The Prehistory of Polynesia*. (Cambridge: Harvard University Press, 1979)
- ⑦ Green, R. C., Lapita. In J. Jennings, ed. *The Prehistory of Polynesia* (Cambridge: Harvard University Press, 1979), pp. 27-60.
- ⑧ Bellwood, P. *Man's Conquest of the Pacific: The Prehistory of Southeast Asia and Oceania*. (New York: Oxford University Press, 1978) (ド・ベルウッド「福木武・服部研二訳」『太平洋：東南アジアとオセアニアの人類史』法政大学出版局、一九八九年)
- ⑨ Green, R. C., Near and Remote Oceania: Disestablishing "Melanesia" in culture history. In A. Pawley, ed., *Man and a Half: Essays in Pacific Anthropology and Ethnobiology in Honour of Ralph Bulmer*. (Auckland: The Polynesian Society, 1991), pp. 491-502.
- ⑩ Diamond, J. M., Express train to Polynesia. *Nature* 336, 1988, pp. 307-308.
- ⑪ Spriggs, M., The Lapita cultural complex: Origins, distribution, contemporaries and successors. *The Journal of Pacific History* 19, 1984, pp. 202-223.
- ⑫ Allen, J. and J. P. White, The Lapita homeland: Some new data and an interpretation. *Journal of the Polynesian Society* 98, 1989, pp. 129-46; J. Terrell, Commentary: What Lapita is and what Lapita isn't. *Antiquity* 63, 1991, pp. 623-626.
- ⑬ Allen, J. and C. Gosden, eds. *Report of the Lapita Homeland Project*. Occasional Papers in Prehistory No. 20. (Canberra: Department of Prehistory, Australian National University, 1991)
- ⑭ Spriggs, M., Dating Lapita: Another view. In M. Spriggs, ed., *Lapita Design, Form and Composition Occasional Papers in Prehistory, No. 19*. (Canberra: Department of Prehistory, Australian National University, 1990) pp. 6-27.
- ⑮ Summerhayes, G., *Lapita Interaction, Terra Australis* 15. (Canberra: Department of Prehistory, Australian National University, 2000); Ishimura, T., In the wake of Lapita: Transformation of Lapita designs and gradual dispersal of the Lapita peoples. *People and Culture in Oceania* 18, 2002, pp. 77-97.
- ⑯ Green, R. C., The Lapita horizon and traditions: Signature for one set of Oceanic migrations. In C. Sand ed. *Pacific Archaeology: Assessments and Prospects (Proceedings of the International Conference for the 50th Anniversary of the First Lapita Excavation, Nouméa, Nouméa 2002)*. (Services des Musées et du Patrimoine, Nouméa, 2003) pp. 95-120.

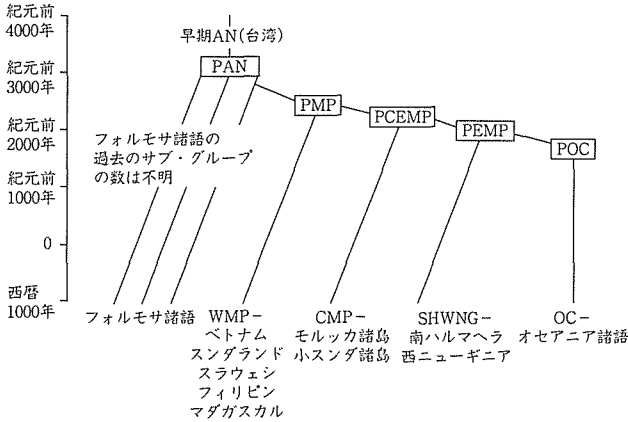


図3 オーストロネシア語族の系統樹

AN = オーストロネシア諸語, MP = マレー・ポリネシア諸語, WMP = 西部マレー・ポリネシア諸語, CEMP = 中央・東部マレー・ポリネシア諸語, SHWNG = 南ハルマヘラ・西部ニューギニア諸語, OC = オセアニア諸語

(本章註② Bellwood 書, 103頁より)

第二章 ラピタ人の起源を求めて——言語学・考古学・形質人類学からみたオーストロネシア語族の拡散

オーストロネシア語族の故地を台湾と位置づけるのは比較言語学の理論、特に音韻変化の系統樹説である。オーストロネシア語族には現在七〇〇から八〇〇の言語が含まれ、台湾から東南アジア島嶼部・メラネシア・ポリネシア・ミクロネシア、さらにアフリカ大陸東岸のマダガスカルに至るまで広範囲に分布している^①。このように多様な言語によつて構成されているもの、それぞれの言語はたがいに関連性を保ち、音韻的に共通した単語も数多くある。そうした単語を手がかりに、共通の祖語における単語から音韻上の変化をともなつて派生的に変化していく様子を想定し、その変化の順序を系統樹に描くことが可能である。その系統樹において、最も初期に分岐した言語ほど古く、祖語に近い言語と考えられる。そして、そうした言語が分布する地域こそ、その語族の故地であるとみなされるのである。なぜなら言語学の理論において、音韻変化は時間の経過とともに一定の割合で生じると考えられており、それならば最初に分

岐した変化こそ最も古い変化であるとみなされるからである。

こうした理論的な手続きにより、現在ではおおまかに五つのクラスターに分けられる系統樹が想定されている(図3)。^② それぞれのクラスターについてもさらに細分した系統樹を描くことができ、例えば五番目のオセアニア諸語はさらにポリネシア・フィジー・中核ミクロネシア・メラネシアの諸言語に細分され、ポリネシア語はさらにトンガ・サモア・ハワイ・タヒチ・北西マルケサス・東南マルケサスといった諸言語に細分される。注意すべきことは、この系統樹がかなり非対称な形状をしていることと、分岐の順序が台湾から東南アジア島嶼部をとってオセアニアに至る道順を示している点である。つまりこれはオーストロネシア集団が移動した形跡を示していると考えられるのである。さらにこのオセアニア諸語の祖語となる祖オセアニア語(POC)については、その想定される分布範囲がラピタ人の分布範囲と一致することから、ラピタ人の用いていた言語はPOCに相当すると考えられるのである。

言語年代学による言語の分岐年代では、PANから台湾の諸言語とPMPの分岐が紀元前四五〇〇年頃、WMPとPCMの分岐が紀元前三五〇〇年頃、CMPとPEMPの分岐が紀元前三〇〇〇年頃、SHWNGとPOCの分岐が紀元前二五〇〇年頃に起こったと推定している。^③ 言語年代学とは、音韻変化が時間の経過とともに一定の割合で生じるとの前提で、基本中核語と呼ばれる一〇〇の単語の共通性が一〇〇年たつごとに八七%に低下するという計算式で分岐年代を推定するものである。^④ ラピタ人の登場は紀元前一五〇〇年頃と考えられているので、言語年代学ではそれよりも古い値が示されている。

また言語学の系統樹説によると、音韻変化の方向性から祖語の単語の形態をある程度推測して復元することができる。こうした手法を語彙復元とよぶが、これもまた語族の起源地を推定する手がかりとなる。なぜなら、復元された語彙は、その起源地の文化や環境をある程度反映すると考えられるからだ。祖オーストロネシア語(PAN)に復元できるものとして、例えば「センザンコウ」「サル」「反芻動物(おそらくシカ)」などの動物についての単語が復元されているが、これ

らは少なくともウオーレス線より西側にしか存在しないものである。ウオーレス線とは、生物地理学において東洋(亜)区とオーストラリア区の間引かれた境界線で、ボルネオとスラウェシ、バリとロンボクの間引かれ、この線の東側では動植物相が急激に減少する。また「台風」や「北」もしくは「冬」といった自然現象も復元されており、これは少なくとも赤道の北側、さらにいえば台風が発生する南シナ海周辺地域を示している。文化的な要素に関しては、「稲」「脱穀された稲」「田」といった稲作に関連する語彙も復元されている。^⑦稲作農耕は中国大陸のいずれかの地域(雲南もしくは長江流域)に起源し、台湾では紀元前二五〇〇年頃の鳳鼻頭文化で確実な稲作の証拠が見つかっている。東南アジア島嶼地域への稲作の導入は台湾経由、もしくは東南アジア大陸部(タイ・ベトナム周辺)からなされたと考えられるが、オセアニア地域では稲作文化自体が欠落している。

このような語彙復元によって、現在のオセアニア世界では欠落した環境や文化に関する単語を復元することができる。例えば温帯・亜熱帯地域に起源した稲作文化は、オーストロネシア集団が熱帯の島嶼地域に進出する段階で、おそらく栽培に適さない気候であったため欠落したものと考えられる。そして語彙復元から想定されるオーストロネシア語族の故地は、台湾周辺地域と見ることができるのである。

考古学からみたオーストロネシア語族の拡散

ベルウッドの台湾起源説においては、ラピタ人の究極の起源地は台湾に求められることになるが、これを考古学的に証明するのは困難な作業である。なぜなら東南アジア地域における新石器文化の初期段階の詳細についてはまだまだ不明な点が多いためであるが、ベルウッドは東南アジア島嶼部一帯、すなわちフィリピンからマレーシア・インドネシアにかけて分布する赤色スリップを施した一連の土器文化がオーストロネシア語族の拡散を示すものとしている。^⑧また台湾では土器文化が紀元前四五〇〇年頃まで遡ることから、これらの地域の新石器文化の起源地にあたりと見なされてきた。そこで

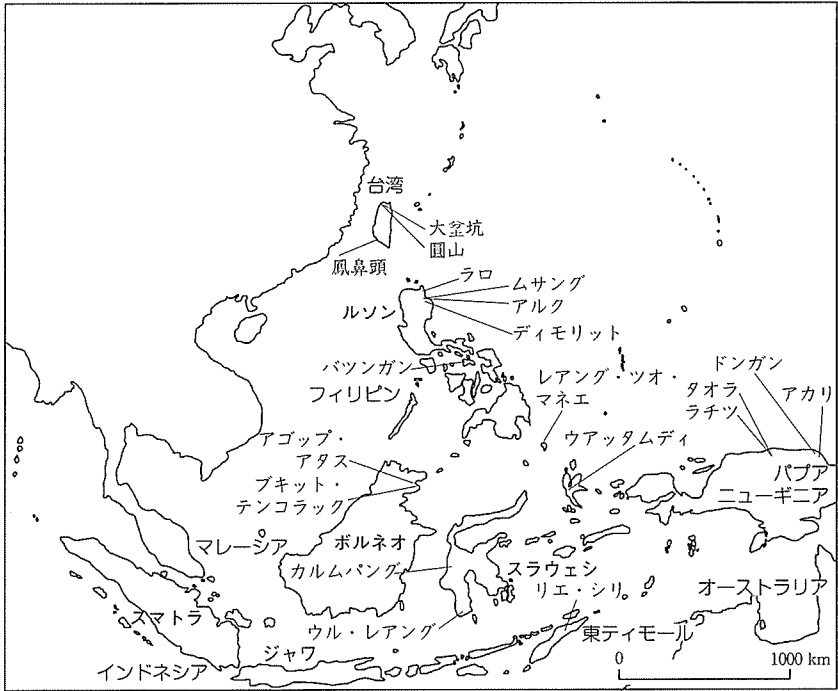


図4 東南アジア島嶼部周辺の新石器文化遺跡の分布

以下では、台湾から東南アジア島嶼部、さらにニューギニア本島にかけての土器文化を概観し、その評価をおこなうこととしたい(図4)。

台湾の土器文化は縄蓆文土器を特徴とする大釜坑文化(紀元前四五〇〇〜三〇〇〇年頃)に始まり、北部では鋸歯印文や円形印文、沈線文で装飾された土器を特徴とする圓山文化(紀元前三〇〇〇年頃〜西暦五〇〇年頃)に後続する^⑨。圓山文化の土器の装飾技法はラピタ土器のそれに類似しており、その祖形となる可能性がある。近年の調査では紀元前二〇〇〇年頃という年代が放射性炭素年代測定により示されている^⑩。一方南部の地域では、赤色に彩色された土器を特徴とする鳳鼻頭文化(紀元前二五〇〇〜五〇〇年頃)が成立する。鳳鼻頭文化の土器には三脚台を有する土器や脚部に透かし穴を有する高坏などが存在し、稲作農耕がおこなわれていたと考えられることから、この文化は中国大陸の影響下にあり、龍山様文化として理解されている^⑪。

フィリピンではルソン島北部のムサング (Musang) 洞窟 (紀元前三七五〇年頃)、^⑬ デイモリット (Dimolit) 遺跡 (紀元前五〇〇〜一五〇〇年頃)、^⑭ アルク (Arku) 洞窟 (紀元前二〇〇年〜紀元前後頃) で赤色スリッパが施された土器群が見つかっており、多くは文様のない無文土器であるが、アルクのものの一部は円形印文による装飾を持つ。またルソン島北部のラロ (Lalo) 貝塚 (紀元前八〇〇年頃)^⑮ および中部のマスバテ島のバツンガン (Bamangan) 洞窟 (紀元前八〇〇年頃)^⑯ からは鋸歯印文や沈線文により装飾された赤色スリッパ土器が見つっており、その文様モチーフはラピタ土器のものと良く似ているが、いずれも年代的にはラピタ土器より新しい。

マレーシアでは、ボルネオ島北部のアゴップ・アタス (Agop Atas) 洞窟 (紀元前二〇〇〇〜五〇〇年頃)、^⑰ ブキット・テニコラック (Bukit Tengkorak) 遺跡 (紀元前一五〇〇〜五〇〇年頃)^⑱ で赤色スリッパ土器が存在し、あるものは円形印文や沈線文によって装飾されている。またブキット・テニコラック遺跡では、インドネシアのタラウド諸島産の黒曜石に加え、ピスマルク諸島のタラセア産黒曜石も出土しているが、タラセア産の黒曜石はオセアニアのラピタ遺跡からも豊富に出土しており、このことはブキット・テニコラックの住人がラピタ人と何らかの関連を持っていた可能性を示唆する。

インドネシアでは、フィリピンとスラウエシの間に浮かぶタラウド諸島のレアング・ツォ・マネエ (Leang Tuwo Manea) 洞窟 (紀元前二五〇〇年頃) から無文の赤色スリッパ土器が見つかっている。^⑲ スラウエシでは、ウル・レアング (Ulu Leang) 洞窟 (紀元前二五〇〇〜一五〇〇年頃) からは赤色スリッパが施されない無文土器が見つかっている。^⑳ またスラウエシのカルムバンゲ (Kalumpang) 遺跡からは鋸歯印文や円形印文で装飾された土器が見つかっており、ラピタ土器のモチーフとも良く似ているが、残念ながら絶対年代が得られていない。^㉑ また東ティモールのリエ・シリ (Lae Siri) 遺跡^㉒ からは、赤色スリッパが施されない無文土器の一群 (紀元前二五〇〇年頃) と、赤色スリッパは施されないが、良く磨かれ、沈線文や半裁竹管文により装飾された土器群 (紀元前一五〇〇〜西暦五〇〇年頃) が見つかっている。^㉓ そしてモルッカ諸島のハルマヘラ島近くのカヨア島のウアッタムデイ (Uatandi) 洞窟 (紀元前一五〇〇〜五〇〇年頃) からは、赤色スリ

表1 東南アジア島嶼部周辺の新石器文化遺跡の編年

	台湾	フィリピン	マレーシア	インドネシア・東ティモール	パプアニューギニア
第1段階 紀元前 4500～ 2500年	大盆坑 圓山 (DS)	ムサング (SP)			タオラ ラチツ アカリ
第2段階 紀元前 2500～ 1500年	圓山 (DS) 鳳鼻頭 (SP)	ディモリット (SP)	アゴップ・ アタス (SP)	レオング・ツオ・ マネエ (SP) ウル・レアング リエ・シリ	
第3段階 紀元前 1500～ 500年	圓山 (DS) 鳳鼻頭 (SP)	アルク (SP) ラロ (DS; SP) バツンガン (DS; SP)"	アゴップ・ アタス (SP) ブキット・テン コラック (SP)	リエ・シリ ウアットム デイ (SP)	ラピタ文化 複合 (DS; SP)

(SP) は赤色スリップおよび赤色彩色、(DS) は鋸歯印文の存在を示す。

ツプが施された無文土器が見つかっている。²³⁾

パプアニューギニアのニューギニア本島からは、北部のセビック・ラム川流域のアカリ (Akarri) 遺跡 (紀元前三〇〇〇年) からはスリップが施されない、沈線文・貼付文・凹線文で装飾された土器が見つかっている。²⁴⁾ またヴァニモ地域のタオラ (Taora) 遺跡 (紀元前三五〇〇年頃)・ラチツ (Lachit) 遺跡 (紀元前三五〇〇年頃) からも、スリップが施されず、爪形文で装飾された土器が見つかっている。²⁵⁾

以上の諸土器文化の編年的・空間的分布をまとめると、三段階に分けることができる (表1)。ここで赤色スリップ土器の分布に着目すると、第二段階 (紀元前二五〇〇～一五〇〇年) で東南アジア島嶼部一帯に広く分布するようになる。例外的にフィリピンのムサング洞窟のもののみ第一段階と古いのが、赤色スリップ土器を組成するフィリピンのディモリット洞窟、インドネシアのレオング・ツオ・マネエ遺跡、ウアットムデイ遺跡の年代は、台湾で赤色土器を組成する鳳鼻頭文化とほぼ同じ、紀元前二五〇〇年頃である。つまり、これらはほぼ同時期に並行して成立したといっても過言ではない。また一方で、赤色スリップを施さない土器文化もインドネシア・東ティモールに存在しており、これらも紀元前二五〇〇年頃に成立していることから、赤色スリップ土器の文化とは別個に成立した在地的な土器文化と考えられる。

また、鋸歯印文土器の分布を見ると、台湾の圓山文化で最も早く (第一段

階) 現われるものの、その分布が広がるのは第三段階(紀元前一五〇〇〜五〇〇年)であり、しかも東南アジア島嶼部では今のところ紀元前八〇〇年を遡るものは見つかっておらず、ラピタ文化複合の初現年代(紀元前一五〇〇年以降)よりも新しい。ただし未発見のミツシング・リンクが将来発見される余地もある。

以上の結果をふまえると、ベルウッドが想定するような、台湾からオーストロネシア語族の拡散に伴って赤色スリッパ土器を組成する新石器文化が東南アジア島嶼部に拡散していくという様相を想定することは困難である。また、ラピタ土器の系統的な起源を赤色スリッパ土器と関連付けるのは困難であり、鋸齒印文土器の広がりも時期的に遅い紀元前一五〇〇〜五〇〇年頃の動向として理解するのが妥当である。

むしろ、赤色スリッパ土器を伴う新石器文化が紀元前二五〇〇年頃に東南アジア島嶼部一帯に自生的に成立したと想定する方が妥当であろう。赤色スリッパ土器を組成する最古の遺跡はムサング洞窟(紀元前三七五〇年頃)であり、これをこの文化の起源とするにはやや慎重になる必要があるものの、紀元前二五〇〇年頃には広くフィリピンからマレーシア、インドネシアにまで分布するようになるので、その背景にはこれらの地域に共通した文化が広がっていたことが想定される。赤色スリッパという要素以外にも、叩き技法による土器成形をおこない、磨製石斧や貝製装飾品を組成し、ブタなどの家畜を飼育し、海産資源を主体的に利用するといった共通点が見とめられ、こうした要素はラピタ文化複合とも共通するものである。そして黒曜石の移動からも示唆されるように、この文化の担い手は東南アジア島嶼部の多島海域を跨いで互いに交流をもっていたものと推測される。

そしてラピタ土器の系統を直接的に辿ることのできる鋸齒印文土器は、赤色スリッパ土器の成立より遅れて、紀元前一五〇〇年頃におそらく台湾の圓山文化を起源として、東南アジア島嶼部からオセアニアに至る範囲へ一気に広がり、ピスマルク諸島まで到達したものと想定される。しかしこの動きの背景には、おそらく人間集団の移動による住人の置換のよきな事態を想定しなくてもよいだろう。それに先立つ赤色スリッパ土器の段階(紀元前二五〇〇〜一五〇〇年頃)において

すでにこれらの地域にはすでに新石器文化が成立しており、各集団間で交流をおこなっていたと考えられるので、この新しい鋸齒印文土器の文化は従来のネットワークを利用することで、急速に移動・拡散することができたと想定される。

最後に、ニューギニア本島においても第一段階において独自に土器文化が成立していたことは注目に値する。土器文化の内容からは同時期の東南アジア島嶼部の赤色スリップ土器との共通性はみとめられず、ラピタ土器との系統的なつながりも見いだせないで、おそらくは在地のオーストラロイド集団の手により自生的に成立した土器文化と考えられる。

形質人類学からみたオーストロネシア語族の拡散

ラピタ人の起源を探る上で最も重要な問題はやはり東南アジア・メラネシア・ポリネシアの人種的多様性、特にモンゴロイドとオーストラロイドの関係であろう。すでに触れたとおり、ニューギニア島およびメラネシア島嶼部の住人はオーストラロイド的な形質を顕著に示すが、ポリネシア人はむしろ東アジアおよび東南アジアの住人であるモンゴロイドに近い形質を示す。しかし、ポリネシア人は特有の形質も有している。例えば彼らは通常のモンゴロイドに比べて平均身長が一〇センチメートルほど高く、体格も立派で、筋骨隆々とした体型をしている。こうした複雑な状況は過去の人類集団の移動の歴史を反映している可能性が高いと考えられる。

ラピタ人に関するオーソドックスなシナリオでは、ポリネシア人はラピタ人の直接の子孫と考えられている。というのも、ポリネシアにおける二次拡散の中心となった西ポリネシア地域に最初に植民したのはラピタ人と考えられ、それ以降にそこで集団の流入・交代が起こった可能性は低いからである。問題となるのはメラネシア島嶼部の住人たちである。ニア・オセアニアの範囲に含まれるニューギニア島およびソロモン諸島にはラピタ人より前にオーストラロイド系の集団が分布していたと考えられるが、リモート・オセアニアに含まれるバヌアツ・ニューカレドニア・フィジーといった地域にはラピタ人が人類史上初めて植民したと考えられている。しかしこれらの地域の現在の住人はオーストラロイド的な形質

をしめしており、西ポリネシア地域のポリネシア人とは異なる。この原因を、オーストラロイド系民族の二次的な植民による遺伝的置換・混合の結果と見るか(台湾起源説)、もしくはラピタ人そのものがオーストラロイド的形質をもつていたと見るかどうかは、議論が分かれるところである。

こうした問題を解決する最も重要な手がかりこそ、ラピタ人そのものの出土人骨である。これにより直接的な人種的形質や系統関係を抽出することができるだろう。しかしこれまで出土したラピタ人骨は質・量ともに不足しており、研究には限界がある。それでもビスマルク諸島のワトム(Watom)人骨、ニューカレドニアのコネ(Kone)人骨、そしてフィジーのナイタンバレ(Naitanba)人骨などの分析を通じて、ラピタ人骨については次のような特徴が抽出されてきた。下顎の底部が丸みを帯びる(ロツカー顎)、シャベル状の切歯、楕円形の中心窩、小さい歯、幅広で寸詰まりの下顎、華奢で長い四肢、鎖骨上の靱帯の結合部の発達、高身長などである。このうちロツカー顎や高身長という特徴はポリネシア人と共通する要素であるが、ラピタ人骨の個体ごとにも変異がみとめられる。

ワトム人骨は一個体の幼児と八個体以上の成人からなるが、概して高身長(成人男子で一七五センチメートル)で、下顎骨が頑強に発達してロツカー顎をなすが、四肢は華奢である。コネ人骨は一個体の成人女性で、比較的高身長(一六一・四センチメートル)であるが、ポリネシア人に顕著なロツカー顎がみとめられない。また長頭で前頭部の幅が狭いという頭骨の特徴は、バヌアツやフィジーといったメラネシア島嶼部の住人と共通するものである。ナイタンバレ人骨は一個体の成人女性で、比較的高身長(一六一・一六四センチメートル)で、比較的短頭で、下顎骨はよく発達するが完全なロツカー顎をなしていない。顔は眉間や鼻骨の突出が弱いためかなり平板で、ポリネシア人よりもむしろ東アジア人的な形質を示し、台湾の墾丁文化(鳳鼻頭文化の一部で紀元前二〇〇〇〜一五〇〇年頃)の人骨との類似性も指摘される。こうした古人骨から得られたラピタ人骨は、おおむねポリネシア人との共通性を強く示すものの、個体ごとにはメラネシアの住人や、東アジアの住人との共通性も見出され、遺伝的な多様性が存在したことが想定される。

また近年では遺伝学、特に mtDNA (ミトコンドリアDNA) の系統関係から集団の移動を探ろうとする研究が活発になってきている。なかでも mtDNA の九塩基対欠損の変異型のひとつである、いわゆるポリネシアン・モチーフ (9-bp del. +16189+16217+16247+16261) の分布に注目が集められている。

ポリネシアン・モチーフは三箇所位置換(突然変異)が見られるが、それらは順を追って生じた。始めが「9-bp del. +16189+16217」で、次に「9-bp del.+16189+16217+16261」となり、最後に「9-bp del. +16189+16217+16247+16261」と変化した。この最初の型は中国大陸から東南アジア、オセアニアまで広く分布しており、古い時期のモンゴロイドに生じた型であることがわかる。二番目の型は、台湾から東南アジア島嶼部、オセアニアにかけて分布するが、大陸部には少なく、オーストロネシア集団の分布と対応する可能性がある。三番目のポリネシアン・モチーフはウオーレス線の東側の地域、ニューギニア島海岸部を含むオセアニアにしか分布しないという特徴がある(図5)。そのため、オーストロネシア語族の拡散およびラピタ人のオセアニアへの進出と何らかの関係がある可能性が高い。なお興味深いことに、これらの変異型はニューギニア高地の住人にはまったく認められない。これは、彼らがオーストロネシア集団の動向からまったく孤立していたことを示す可能性が高い。

ここで問題となるのが、この変異がいつ生じたかということである。mtDNA の九塩基対欠損で置換がおこる確率は統計的に算出することが可能である。これはしばしばDNA の分子時計と評され、その系統関係や起源を探る手がかりとして用いられている^②。ポリネシアン・モチーフが分布するのはウオーレス線より東側の地域であり、置換が発生したのはインドネシア東部あたりと考えられる。この地域でこの置換が発生したと推定される年代は、九五%の確率で紀元前三万二五〇〇〜三五〇〇年の間で、その中央値は紀元前一万五〇〇〇年である。これはこれまで推定されているオーストロネシア語族の拡散よりかなり古い値となる。

ポリネシアン・モチーフと同様の分布の傾向を示すものとして、アルファ・グロビン欠損ハプロタイプ、Y染色体遺伝

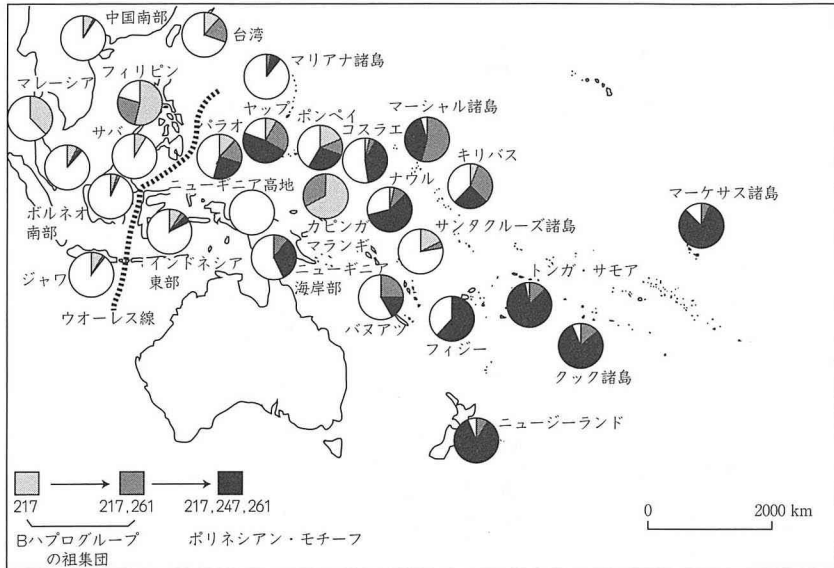


図5 mtDNAの九塩基対欠損の変異型のひとつ「ポリネシアン・モチーフ」と、その祖型の地理的分布 (本章註⑩ Oppenheimer 論文, 62頁より)

子のハプロタイプなどが挙げられる。^⑩ アルファ・グロビン欠損ハプロタイプをここでは八種にわけ、その地理的な分布を見ると、Ht1~5までが東南アジアに、Ht6~8までがオセアニアに特徴的に分布し、およそウォーレス線がその境界となっている。また、Y染色体遺伝子のハプログループ「RPS4Y/M130/38(10)」と「M9/4/5(24)」の地理的分布を見ると、いずれもウォーレス線より東側のインドネシア東部とオセアニアにしか分布しない。これらのデータを示しステファン・オッペンハイマーは、オセアニアのオーストロネシア語族の人間集団の遺伝的な起源地はインドネシア東部にあり、中国大陸や台湾の集団の遺伝的プールが関与した痕跡はほとんどみとめられないと論じた^⑪。ジェフリー・ラムらによるmtDNAの第V領域の遺伝子多型の地理的分布の分析でも東南アジア島嶼部起源説が示されている^⑫。mtDNAの第V領域の遺伝子多型は、通常の長さ「XX」であるが、変異によっていくつかのパターンが生まれる。このうち「XeX」は東南アジア島嶼部およびオセアニアに分布するが、中国大陸および東南アジア大陸部には分布しない。一方、「XcH」は中国大陸お

よび東南アジア大陸部に分布するが、東南アジア島嶼部およびオセアニアには分布しない。つまりここでも、オセアニアの住人の起源地として中国大陸ではなく東南アジア島嶼部であることが支持される。なおここでの東南アジア島嶼部はウォレス線の西側にあるボルネオとフィリピンを含んでおり、オッペンハイマーよりも広い範囲を想定している。なお、「X1」はアジアからオセアニア一帯に広く分布するにもかかわらず、ニューギニアとオーストラリアには分布しない。つまりこれはモンゴロイドに関連する型であり、オーストラロイドとは区分されるということを示しているのだろう。ただしこの研究にはオーストロネシア集団の故地と考えられる台湾のデータが含まれていないのは惜しまれる。

一方で、台湾周辺とのつながりを示すデータも存在する。それは白血球抗原の複合遺伝子(HLA)の研究である。HLA-DPB1型のうちいわゆるアジア型「allele 0301」の地理的分布を見ると、中国大陸・台湾ともに高率で、インドネシアおよびニューギニア高地では低率であるが、ニューギニア島海岸部・ポリネシア(サモア)では再び高率に転ずる。つまり、中国大陸・台湾とオセアニアはよく似た様相を示し、後者は前者に起源した可能性が高いと評価できるのだ。

これら遺伝学の成果は注目に値するものであるが、注意しなければならぬことは、データはすべて現在の住人から採られたものであることである。現在の住民の構成は、必ずしも過去に起こった一度の集団の移動の結果をそのまま反映しているわけではない。集団はその後移動したかもしれないし、婚姻などにより他集団と遺伝的な交換をおこなったかもしれない。さらに島という環境では遺伝的浮動(選択圧による影響を受けずに遺伝的な偏りが生じる現象)も起こりやすく、集団の遺伝的な構成を変えてしまうバイアスも考慮せねばならない。ただ総合的にいえることは、オセアニアのオーストロネシア集団の遺伝的な起源のすべてを台湾に求めることは困難で、むしろ東南アジア島嶼部である可能性が高いということである。このことはつまり、台湾の集団が東南アジア島嶼部に進出し、続いてオセアニアに移動したという「人口移動モデル」は成り立たず、東南アジア島嶼部には古い段階から一定数の人口が存在し、オセアニアのオーストロネシア集団の起源となる遺伝子プールを提供した、と考えるのが妥当となる。もともとHLAの研究からも示されるとおり、台湾か

らの遺伝的流入をまったく排除することはできない。さらにニューギニア島においては、高地の住人はほとんど遺伝的には孤立するものの、海岸部の住人は遺伝的に何らかの交流が存在したことが示されている点も重要である。

総合的シナリオ

以上、ラピタ人の起源をめぐる言語学、考古学、形質人類学によるそれぞれの知見を概観してきた。しかしそれぞれの知見は必ずしも一致しておらず、このことがラピタ人の起源を探る上で難しい課題となっている。しかしここではあえて、これらを説明する統合的なシナリオとして次のような流れを想定したい。

① まず台湾を起源として、比較的小規模な人口集団が東南アジア島嶼部に移動した(紀元前一五〇〇年頃)。彼らはオーストロネシア語族の話者集団であった。

② 東南アジア島嶼部においては、すでにそこに存在した赤色スリッパ土器を用いる新石器文化の集団が相当規模でそれに合流し、さらに東へと移動した。

③ ニューギニア島では、海岸部に住むオーストラロイド系住人と接触し、その集団の一部をメンバーに加え、さらに東へ移動した。

④ ビスマルク諸島に至り、ラピタ人という集団が成立した。遺伝的に見たラピタ人は多様であり、少数の台湾起源の始祖集団、大多数の東南アジア島嶼部の集団に加え、ニューギニア島海岸部でヒッチハイクしたオーストラロイド集団をも含む混成部隊であった。言語的には祖オセアニア語(POC)を用いた。

まず言語学的にはラピタ人の言語はオーストロネシア語族の故地である台湾に辿れる。しかし考古学的に見て東南アジア島嶼部の赤色スリッパ土器をもつ新石器文化の起源を台湾に辿ることは困難で、むしろオーストロネシア語族の拡散と対応する考古学的証拠は紀元前一五〇〇年頃に始まる鋸齒印文土器(圓山文化)の拡散である。またオセアニアにおける

オーストロネシア集団の遺伝的要素の大部分は東南アジア島嶼部に起源を求めることができ、少なくとも東南アジア島嶼部におけるオーストロネシア語族の拡散については、台湾方面からの大規模な人口の移動・置換を想定するよりも、むしろ言語・文化といった情報の移動・拡散を想定する方が妥当である。その具体的な可能性として、台湾と東南アジア島嶼部の間で交流が活発化し、それに伴い台湾起源のオーストロネシア語族の言語が交易語・共通語としてこの地域一帯に広がったという事態が想定される。交流が活発化した背景として、言語学から想定されるように稲作の技術が台湾から東南アジア島嶼部へ伝播したことが考えられる。こうした交流の中で、白血球抗原複合遺伝子(HLA)のアジア型をもった集団が台湾から移動してきたと想定される。

オセアニアのラピタ文化複合は東南アジア島嶼部の赤色スリップ土器をもつ新石器文化との共通性が高く、また形質人類学的にもラピタ人およびオセアニアの住人は東南アジア島嶼部の住人の共通性が高く示されることから、ラピタ人集団の主体は東南アジア島嶼部に起源を求めることができる。すなわちオーストロネシア語族の拡散のきっかけは台湾にあつたとしても、実際にオセアニア方面への人類移動の主体を成したのは東南アジア島嶼部に遺伝的起源をもつ集団であつたと想定される。

ニューギニア島においては、高地の住人にはオーストロネシア集団との遺伝的交流の痕跡が見いだせないものの、海岸部の住人にはmtDNAのポリネシアン・モチーフが存在するなど一定の遺伝的交流の可能性が示唆されることから、彼らの一部はオーストロネシア集団の移動に合流し、その中にオーストラロイド由来の遺伝要素を加えることとなった。ラピタ人骨におけるコネ人骨のメラネシア的形質は、これに由来するものと考えられる。

このようにして成立したラピタ人は、遺伝的に多様な出自をもつ個体からなる混成部隊であつたと想定される。そしてビスマルク諸島からメラネシア島嶼部、さらに西ポリネシアに拡散する過程で、メラネシア島嶼部にはオーストラロイド的遺伝的形質を強く示す個体が多く定着し、一方西ポリネシアには台湾および東南アジア島嶼部の集団起源の遺伝的形質

を強く示す個体が多く定着することにより、メラネシア島嶼部の住人とポリネシア人との差異が生じるようになったと考えられる。

- ① 近年まじりオーストロネシア語族研究の概観に「ゴウジ」を以下を参照。
Pawley, A. and M. Ross, Austronesian historical linguistics and culture history. *Annual Reviews of Anthropology* 22, 1993, pp. 425-459.
- ② Bellwood, P., *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. (Honolulu: University of Hawaii Press, 1997)
- ③ Blust, R., The Austronesian homeland: A linguistic perspective. *Asian Perspectives* 26, 1984-1985, pp. 45-67.
- ④ Lees, R. B., The basis of glottochronology. *Language* 29, 1953, pp. 113-125.
- ⑤ Blust, R., The linguistic value of the Wallace Line. *Büdr. Taal-Land-Volkenkd.* 138 (2-3), 1982, pp. 231-250.
- ⑥ 註⑤ Blust 提論。
- ⑦ Blust, R., Austronesian culture history: Some linguistic inferences and their relations to the archaeological records. *World Archaeology* 8, 1976, pp. 19-43.
- ⑧ 註⑥ Bellwood 提論。
- ⑨ Chang, K. C., *Renghitan, Tapenkeng, and the Prehistory of Taiwan* (New Haven: Yale University Publications in Anthropology 73, 1969)
- ⑩ Bellwood, P., The Austronesian dispersal and the origin of languages. *Scientific American* 265 (1), 1991, pp. 88-93.
- ⑪ 註⑨ Chang 提論。
- ⑫ Thiel, B., Excavations at Musang Cave, Northern Luzon, Philippines. *Asian Perspectives* 28, 1988-89, pp. 61-81.
- ⑬ Peterson, W., Summary report of two archaeological sites from north-eastern Luzon. *Archaeology and Physical Anthropology in Oceania* 9, 1974, pp. 26-35.
- ⑭ Thiel, B., Excavations at Aruku Cave, northern Luzon, Philippines. *Asian Perspectives* 27, 1986-1987, pp. 229-264.
- ⑮ Thiel, B., Excavations at the Lallo shellmiddens, northern Luzon, Philippines. *Asian Perspectives* 27, 1986-1987, pp. 71-94; 著書: 田中重徳・M. L. Aguilera, Jr.・小川英文・田中重徳「トロロ洞家跡の発掘」『「土曜シンポジウム」一九九一年 四九一-五三〇頁。
- ⑯ Solheim, W. G. II, The Batungan cave sites, Masbate, Philippines. *Archaeology and Physical Anthropology in Oceania* 2, 1968, pp. 21-62.
- ⑰ Bellwood, P., *Archaeological Research in South-Eastern Sabah*. (Kota Kinabalu: Sabah Museum Monograph 2, 1988)
- ⑱ Bellwood, P. and P. Koon, Lapita colonists leave boats unburned. *Antiquity* 63, 1989, pp. 613-622.
- ⑲ Bellwood, P., Archaeological research in Minahasa and the Talaud Islands, north-eastern Indonesia. *Asian Perspectives* 19, 1976, pp. 240-288; Bellwood, P., The Buidane culture of the Talaud Islands. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* 2, 1981, pp. 69-127.
- ⑳ Glover, I. C., Ulu Leang cave, Maros: A preliminary sequence of post-Pleistocene cultural development in Southeast Sulawesi.

- Archipel* 11, 1976, pp. 113-154.
- ② Heekeren, H.R. van. *The Stone Age of Indonesia*. (The Hague: Nijhoff, 1972)
- ③ Glover, I. C. *Archaeology in Eastern Timor. Terra Australis* 11. (Canberra: Department of Prehistory, Research School of Pacific Studies, Australian National University, 1986)
- ④ Bellwood, P. Southeast Asia before prehistory. In N. Taling ed., *The Cambridge History of Southeast Asia*, Vol. I (Cambridge: Cambridge University Press, 1992) pp. 55-136.
- ⑤ Swadling, P. Changing shorelines and cultural orientations in the Sepik-Ramu, Papua New Guinea: Implications for Pacific prehistory. *World Archaeology* 29, 1997, pp. 1-14.
- ⑥ Gorecki, P. A Lapita smoke screen? In J.-C. Gallipaud, ed., *Poterie Lapita et Peuplement, Actes du Colloque LAPITA*. (Nouméa: ORSTOM, 1992) pp. 27-47.
- ⑦ Pietrusewsky, M. Lapita origin: An osteological perspective. In P. J. C. Dark and R. G. Rose, eds. *Artistic Heritage in a Changing Pacific*. (Honolulu: University of Hawaii Press, 1993) pp. 15-19.
- ⑧ 片山一道「ポリネシア人——石器時代の南洋航海者たち——」同朋社、一九九一年。
- ⑨ Pietrusewsky, M., J.-C. Gallipaud, and F. Leach. A skeleton from the Lapita site at Koné, Foaé Peninsula, New Caledonia. *New Zealand Journal of Archaeology* 18, 1996, pp. 25-74.
- ⑩ Nunn, P. D., T. Ishimura, W. R. Dickson, K. Katayama, F. Thomas, R. Kumar, S. Matararaba, J. Davidson, and T. Worthy. The Lapita Occupation at Naitabale, Moturiki Island, central Fiji. *Asian Perspectives* 46, 2007, pp. 96-132.
- ⑪ 片山一道「小さな島の巨人たち——自然人類学からみたポリネシア文化——」国立民族学博物館編『オセアニア——海の人類大移動——』図報新 二〇〇七年、五三—五七頁。
- ⑫ Oppenheimer, S. Austronesian spread into Southeast Asia and Oceania: Where from and when? In C. Sand ed. *Pacific Archaeology: Assessments and Prospects (Proceedings of the International Conference for the 50th Anniversary of the First Lapita Excavation, Koné-Nouméa 2002)* (Services des Musées et du Patrimoine, Nouméa, 2003) pp. 55-70.
- ⑬ Morgan, G. J., Emile Zueckerandl, Linus Pauling, and the Molecular Evolutionary Clock, 1959-1965. *Journal of the History of Biology* 31 (2), 1998, pp. 155-178.
- ⑭ 註⑫ Oppenheimer 補説註。
- ⑮ 註⑬ Oppenheimer 補説註。
- ⑯ Lum, J. K. and R. L. Cann, mtDNA and language support a common origin of Micronesians and Polynesians in Island Southeast Asia. *American Journal of Physical Anthropology* 105, 1998, pp. 109-119.
- ⑰ Hagerberg, E. Genetic affinities of the principal human lineages in the Pacific. In G. R. Clark, A. J. Anderson, and T. Vunidlo, eds. *The Archaeology of Lapita Dispersal in Oceania. Terra Australis* 17. (Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University, 2001) pp. 167-176.

お わ り に——ラピタなる現象とは何か？

本論で示したラピタ人の起源およびオーストロネシア語族の拡散のシナリオは、ベルウッドの描く新石器文化と語族の拡散の理論とはそぐわない点もある。本論では、東南アジア島嶼部の赤色スリッブ土器を特徴とする新石器文化の成立とオーストロネシア語族の拡散を区分し、後者の言語の拡散を交易用言語・共通語の成立として理解した。しかしベルウッドは『農耕起源の人類史』のなかで、交易が言語の大規模拡散の要因になることはほとんどなく、ピジン（交易のための混成語）やクリオール（ピジンが母語化した言語）が語族を形成することもありえないとし、その言語の話者が実際に移動するのでなければ言語が広がることはない^①と主張する。しかしこうしたベルウッドの指摘に反し、ピジンやクリオールを積極的に評価した言語学的研究も盛んになつてきている^②。

むしろ本論のシナリオは、オーストロネシア語族の拡散を説明するもうひとつの仮説「ヌサンタオ仮説」およびそれに続く一連の仮説と呼応する部分も多い。

ヌサンタオ仮説は、東南アジア考古学の泰斗であるウイルヘルム・ソルハイムにより提示され、それによると紀元前五〇〇〇年頃にインドネシア周辺でオーストロネシア集団の形成がはじまったが、彼らは海洋性の環境に適応した海人集団で、その一派は北上してフィリピンから台湾へ展開した。すなわち台湾起源説とは逆のルートを想定しており、その根拠のひとつとして、この海域では海流が南から北へむかつて流れていることを挙げている^③。こうして東南アジア島嶼部の一帯にヌサンタオ交易ネットワークが形成され、これが後にベトナムから東南アジア島嶼部一帯に広がるサフィン文化や、フィリピンに分布するカラネイ文化につながっていくとした^④。またウイリアム・ミーチャムはソルハイムの仮説を受けて、「ナンハイ・ランド仮説」を提示し、フィリピンからインドネシアにかける海域こそオーストロネシア集団の起源地であるとした^⑤。これらをうけて後藤明も、オーストロネシア語族の言語が交易用の言語として成立したと想定し、東南アジア

島嶼部の集団が台湾にむけて北上した可能性を示した。後藤によると、海人集団としてのオーストロネシア集団が成立したのは、島影のすくない台湾付近ではなくむしろフィリピンやボルネオ島あたりの多島海域のほうがふさわしいという。これらのシナリオに共通するのは、島嶼間における交易を重視し、交易によってオーストロネシア語族の成立・拡散がなされたという点である。これらの説の当否はともかくとして、交易をオーストロネシア語族の拡散の重要な要素と見る点については本論のシナリオと共通するものである。

さらにラピタ人という集団を見たとき、そこには台湾起源の人間、東南アジア島嶼部起源の人間、ニューギニア海岸部起源の人間が含まれていたと想定され、彼らは共通語としてオーストロネシア語族の一派である祖オセアニア語（POC）を話していたと考えられる。すなわち彼らはひとつの言語Ⅱひとつの民族として規定される集団ではなく、ある共通の枠組みによって結束した人間の集団であると考えられる。ではその枠組みとは何か？

それは直喩的にいうならば「船」である。ラピタという名の「船」に乗り込むことで、その人間は運命共同体としての「ラピタ人」になったのだと考える。

ラピタ人はリモート・オセアニアの境界を越えて、人類未踏の島々へと移動していった。それには強固な目的意識と族意識が求められたことだろう。ラピタ人の社会は威信財システムに基づく首長制によって組織されたと想定され、また精緻な文様が施されたラピタ土器は集団のアイデンティティを表象するものと考えられる。ラピタ文化複合が顕著な斉一性と独自性を示すのは、集団としての一体性を確認するための文化的な仕組みであったと考えられる。そしてラピタ人が船出した動機は、新天地を求めようとするある種の宗教的・思想的なムーブメントではないかと思われる。

すなわちラピタなる現象を定義するならば、それは単一の民族の移動ではなく、「民族」や「文化」といった排他的な枠組みを横断するムーブメントとしてとらえることができるだろう。

- ① 第一章註⑨ヘルウッド前掲書、二八二頁・二九七頁。
- ② 註①ヘルウッド前掲書、三二三頁・訳注③。
- ③ Solheim, W. G. II. The Nusantao hypothesis: the origin and spread of Austronesian speakers. *Asian Perspectives* 26, 1984-1985, pp. 77-88.
- ④ Solheim, W. G. II. Further relationships of the Sa Huynh-Kalanay pottery tradition. *Asian Perspectives* 8, 1964, pp. 196-211.
- ⑤ Meacham, W. On the improbability of Austronesian origins in South China. *Asian Perspectives* 26, 1984-1985, pp. 89-106.
- ⑥ 後藤 明「海を渡ったモンゴロイド…太平洋と日本への道」講談社、二〇〇三年。
- ⑦ Friedman, J. Catastrophe and continuity in social evolution. In C. Renfrew, M. J. Rowlands, and B. Segraves, eds. *Theory and Explanation in Archaeology: the Southampton Conference*. (New York: Academic Press, 1982) pp. 175-96; 石村 智「薩応マルトのラビタ人の拡散」前川和也・岡村秀典編『国家形成の比較研究』学生社、二〇〇五年、二六〇―二八一頁。

（奈良文化財研究所・研究員）

The Origin of the Lapita Peoples and the Dispersal of Austronesian Peoples

by

ISHIMURA Tomo

In the modern era archaeology has played a major role in efforts to define “ethnos” in a scientific manner. However, the study of Indo-Europeans and “Aryans” promoted by Gustav Kossina was exploited in the context of National Socialism and racial persecution. Recently multidisciplinary approaches including linguistics, archaeology and biological anthropology have become vitally important in understanding human history. In this paper, I critically review and explore the issue of the Lapita peoples and the dispersal of Austronesian peoples in the Pacific, which is one of the most pressing research topics in the studies of human history.

First, I review the study of the peopling of Oceania, especially the issue of the origin of the Polynesians. There have been several theories about Polynesian origins, such as the theory of South American origin proposed by Thor Heyerdahl in the mid-twentieth century. Since the discovery of “Lapita pottery” in the late twentieth century (which was recovered from the regions between the Bismarck Archipelago, Papua New Guinea, and the western Polynesia including Tonga and Samoa), the majority of scholars have supported the theory of the “Lapita peoples.” It has been thought that the Lapita peoples were a part of the Austronesian-language-speaking group, and that they were the common ancestors of Polynesian, Micronesians, and Austronesian-speaking Island Melanesians. The theory of “Express Train to Polynesia” proposed by Peter Bellwood and Jared Diamond assumes that the Lapita peoples originated in Taiwan on the basis of the study of comparative linguistics of Austronesian languages, and that they migrated to Oceania via insular Southeast Asia. Some scholars have believed that the Lapita peoples were derived from Australoid groups in the Bismarck Archipelago, that is the “Melanesian-origin” theory. However, the archaeological evidence from the Bismarck Archipelago indicates no direct link between the indigenous aceramic culture of the Australoid peoples and the newly established Neolithic culture of the Lapita peoples. Therefore, the theory of “Express Train to Polynesia” has widely been accepted

in the prehistory of Oceania. However, there are still many unsolved questions about the origin of the Lapita peoples. In particular, no hard archaeological evidence has yet been recovered demonstrating a direct link between Taiwan, Southeast Asia and Oceania.

Thus I have explored Neolithic cultures of insular Southeast Asia in the millenniums prior to the Common Era as well as recent studies of linguistics and physical anthropology in order to discover the origin of the Lapita peoples and the Austronesians. Linguistic studies of Austronesian languages support the theory of Taiwan origin. An archaeological review of Neolithic cultures in insular Southeast Asia demonstrates that the culture of red-slipped pottery was established indigenously in several regions of Island Southeast Asia around 2500 BC. Analyses of skeletal remains from Lapita sites show a variety of physical characteristics including not only Polynesian elements but also Melanesian and East Asian elements, which implies multiple genetic origins of the Lapita peoples. Recent genetic studies such as those of mtDNA and Y-chromosome DNA indicate that the Oceanic peoples derived mainly from Southeast Asia and also suggest possible gene mixture from Australoid peoples in New Guinea. I synthesize this evidence from archaeology, linguistics and physical anthropology to present a comprehensive scenario about the peopling of the Pacific.

The scenario I propose in this paper rejects the previous scenario that the emergence of Neolithic cultures in insular Southeast Asia was associated with the dispersal of Austronesian peoples and demonstrates that the dispersal of languages was accomplished by activities of inter-regional exchange between Neolithic cultures in insular Southeast Asia, rather than human migrations from Taiwan. The research also indicates the possibility that the Lapita peoples were composed of individuals genetically derived from various origins, mainly from the population of insular Southeast Asia but also from Taiwan and Australoid populations in New Guinea. Therefore, the phenomenon of the Lapita cannot be defined as a migration of a single ethnic group, but should be seen as a trans-ethnic and trans-cultural movement of these peoples.